

怪談物件マヨイガ2

蒼月海里

第一回

いばら
茨の救済

吉原知世よしはらともよは、会社のねっとりした空気が自分にまとわりつくのを感じて辞易しやくいした。

彼女が採用されたのは、都心に位置している或あるIT企業だった。小さなオフィスビルのワンフロアに、三十人ほどの従業員が詰め込まれている。

自分の隣では、先輩社員が不機嫌そうな顔でパソコンのキーボードを叩いている。知世はそんな先輩社員を視界に入れないようにしながら、自分の仕事に集中していた。

終業時間まで、あと三十分。

ブラインドのすき間から漏れる陽の光は弱くなり、街灯がぼつぼつと街を照らす時間になった。

もうすぐで仕事が終わる。これを提出すれば、定時に上がれそう
だ。

だが、そう上手くいかないのを知世は知っていた。

仕事が一つ終われば、更にもう一つ積まれてしまうのだ。たとえば、それが終業時間前後でも。

「あのだ」

隣席の先輩社員の声がかかる。

「は、はい！」

知世は慌てて振り向くが、先輩はモニターに釘付けなままだった。

「土日は何時から来れる？」

「えっと、土日はお休みですよね……？」

知世は、恐る恐る訊ねた。

求人サイトの募集要項には、そう書かれていたはずだ。なのに、先週の土曜日にも出勤させられた。

流石に、今週末は休めると思ったのに。録りためていたドラマをさすが見たり、新しい服を買いに行ったりしたかったのに。

すると、先輩社員は知世の方を振り返り、ぎろりと睨みつける。

「休みってことになってるけど？」

有無を言わせぬ気迫だ。文句あるかと続かんばかりである。

「それでも、今進めてるプロジェクトの作業を一刻も早く終わらせなきゃいけないから。俺達も土日出勤してるし」

「はあ……」

知世は生返事をしてしまう。

彼女の近くの席では、別の先輩が「ちよつと息抜きしてくる」と会議室に向かった。他の先輩達も、「じゃあ俺も」とバタバタと席を立った。

会議室には大きなモニターがあり、最新のゲーム機が繋がっていた。福利厚生と称して、社長が導入したものだだった。

就業時間中に度々ゲームをしているから、プロジェクトの進捗状況が悪いのではないだろうか。仕事をすべき時間と休息時間の区別がついていないのではないだろうか。

だからこそ、休むべき土日も出勤しなくてはいけないのではないか。

知世はそう思ったが、とても口に出せる状況ではなかった。目の前の先輩社員の視線が、針のように痛いのだ。

「土曜日……なら……来れます……。日曜日はちよつと……用事が……」

「ふーん」

先輩社員は、薄情者と言わんばかりの投げやりな態度だった。

貴重な土曜日を差し出したというのに、何という仕打ちだ。しかも、失われた土曜日の代休はない。休日出勤しても、手当てがつくわけではない。

全ては、「みなし」で支払われているからだ。

月給が高いと思って入社した知世だが、とんだ畏^{わな}だった。社長直々に面接をしてくれて、その日に採用が決まって喜んでいたので。

東京の企業で正社員になれて、実家の両親も喜んでくれていたのに。

肝心の社長は、不在ことが多い。若くて行動的なせいか、社長のデスクにいることはほぼなかった。

「で、何時から来れるの」

「えっ」

「土曜日だよ」

先輩社員は苛^{いらだ}立ったように言った。

「えっと……、いつも通りに……」

「あっそう」

何という素っ気なさだ。せつかくの休日を潰しているのに、礼の一つもないのか。

知世は項垂^{うなだ}れながらも、終わりそうな仕事を再開する。もしかしたら、今日は早く帰れるかもしれないと希望を持ちながら。

でも、昨日も追加の仕事を押し付けられて残業を余儀^{よ儀}なくされた。

かれこれ、ここのところ毎日だ。

今日は一体、どうなることやら。

「お前、そんなことも分からないのかよ」

別の方から声が飛んできた。

知世はビクツと身体を震わせながら、そちらを見やる。

だが、それは自分に向けられたものではなかった。

「えへへ、すいません。無知なもので……」

向かい席のチームの、先輩男女二人の会話だった。

先輩といっても、女性は自分より年下だ。それでも、この会社に入社したのは彼女の方が早いので、知世は頼れる年下として尊敬していた。

その年下先輩を、男性の先輩は殴りつけた。

「えっ……」

ゴツという鈍い音がした。それでも、知世以外は気にした様子はない。なかつた。

殴られた年下先輩もまた、へらへらと笑ったままだった。

「ほんつとに、お前はダメな奴だな」

男性の先輩もまた、へらへらと笑いながら自分の仕事を再開した。

知世は、信じられないものを見てしまった。

頬が赤くなったり吹っ飛んだりしたわけでもないのに、男性の先輩は力を加減したのかもしれない。しかし、拳こぶしで女性を、音が出るほどの力で殴ったのは事実だ。

パワハラじゃないの？

先輩二人は、ランチに行く時も一緒に、仲がいいと思っていた。年下先輩は、腰巾着のように男性先輩について行くほどだった。だが、仲がいいとはいえ、さすがにこれはやりすぎではないだろうか。胃の中に酸っぱいものが広がるのを感じながらも、知世は進めていた仕事を終えた。

「あの、終わりました」

知世はファイルを共有フォルダに入れ、隣席の先輩に報告する。終業時間から五分過ぎていたが、誤差の範囲だろう。

すると、先輩は知世の方を振り向かず、マウスを数回クリックした。

「今、別のタスクを転送しておいたから。それもやっておいて」

「えっ、でも、私の仕事はもう……」

「君は新人で仕事が少ないんだから」

先輩はそう言い切ると、話は終わりと言わんばかりに口を噤くんだ。

また、定時では上がれなかった。

知世は項垂れながら、社員の進捗表を何気なく見やる。そこには、社員がどんなタスクを抱えていて、どんなタスクを終わらせたのかが記されているのだが、知世のタスクが特別に少ないわけではなかった。

そして、渡された仕事は、すぐに終わりそうになかった。

「……少し、休憩してきます」

「あれ？ タバコ吸わないんじゃないのかなったつけ」

先輩社員にとって、休憩とは喫煙を指すらしい。喫煙所はオフィスの外にあり、喫煙者はそこで長々とおしゃべりをしている。目の前の先輩社員も、そのうちの一人だ。

喫煙者は息抜きが出来るのに、非喫煙者は休む権利すらないのか。理不尽のあまり、知世は目頭が熱くなりそうになる。だが、込み上げてくるものをぐっと堪えた。

「この仕事が終わるの、遅くなりそうなので」

「あ、そう。夕食だったら、カップ麺があるから」

先輩はオフィスの一角を指さした。

そこには、福利厚生と称したお菓子とカップ麺が山積みになっている。福利厚生というと聞こえがいいが、要は、それを食べて残業や休日出勤をしるということだった。

残業の覚悟を決めた他の社員が、既にデスクでカップ麺を啜^{すす}っていた。シーフードの香りが漂^{ただよ}う中、知世もまた、虚^{うつ}ろな目でバランス栄養食のビスケットに手を伸ばしたのであった。

知世がコーヒーを淹れてデスクに戻ろうとすると、向かい席に人だかりが出来ていた。あのパワハラ男性先輩の席である。

「……どうしたんですか？」

知世が遠慮がちに輪に入ると、パウハラ先輩はモニターを指して言った。

「これ、答え分かる？」

簡単なクイズだった。

隣席にいた年下先輩は、「えー、難しいですね。分からないです」と苦笑していた。他の社員もまた、同じような反応だった。

「それ、答え分かります。多分、こうだと思えますよ」

特に何も考えず、知世は答えを教えた。

パウハラ先輩は答え合わせをして、「あー、成程なるほどね。まあ、俺も分かっていたけど」と肩を竦すくめ、集まっていた社員達はぞろぞろと各々の席に戻った。

知世は、ちよつとした優越感を得て、少しだけ元気が出た。

年上として良いところを見せられたかもしれないと思い、何気なく年下先輩の表情を盗み見ようとした。

だが、彼女の濁にごった目と合い、ぎよつとした。

年下先輩の顔からは、いつも浮かんでいる笑みが消え、ただ、侮ぶ蔑べつの表情だけが浮き彫りになっていたのだ。

「吉原さん、空気読んで下さい」

「えっ、それって……」

どういうこと、と問うよりも早く、年下先輩は目をそらし、自分の仕事に戻ってしまった。

他の社員の、キーボードを叩く音だけがオフィス内に響く。知世は呆然ぼうぜんとその場に立ちつくした。

年下先輩は、空気を読んで分からないふりをしていたということだろうか。

パウハラ先輩の「分かってたけど」というのは負け惜しみではなく、本当に答えが分かっている、皆が分からないクイズを得意顔で解いてみせたかったということだったんだろうか。年下先輩はそれを察して、敢あえて、分からないふりをしていたのだ。

白けた空気が周囲に漂っていた。知世は居ても立っても居られず、早足で自分の席に戻った。

コーヒーからは白い湯気が立っているはずなのに、タンブラーごしに温かさを感じられない。指先の感覚は、すっかり無くなっていた。

渡された仕事を早く終わらせて、帰宅しよう。

知世は己の仕事に全神経を集中させることにした。キーボードに指を走らせて、画面に釘付けになりながらタスクを進めた。

一段落つくころには、飲みかけのコーヒーはすっかり冷めていた。だが、集中したお陰で、それほど遅くならず仕事が終わった。

さすがに終業時間もかなり過ぎているし、今日の仕事はこれで終わりだろう。総務部のメンバーはだいたいぶ前に帰宅し、オフィスの一角だけがガランとしている。

知世も、一刻も早く彼らと同じように帰宅したかった。終わった仕事を共有フォルダに放り込み、「終わりました」と先輩に報告した。

だが、先輩はマウスを数回クリックし「次の仕事を送った」と無慈悲に言い放った。

まだ仕事をさせる気¹³

心の悲鳴が漏れそうになったが、なんとか押し殺した。

だが、顔には出ていたようで、先輩はぎろりと知世をねめつけた。

「社長に気に入られてこの企画部に入れたから、いい気になっているんだろうけど」

先輩は嫌味たっぷりの前置きをしながら、こう続けた。

「俺はこの仕事に就くために、色々なものを積み上げて来たんだ。

ぼっと出のお前が楽を出来ると思うなよ」

明らかな敵意と嫉妬^{しつと}が、そこには含まれていた。露骨な負の感情をぶつけられた知世は、何も言い返せなかった。

知世はもう、集中してタスクを終えることに意味を感じられなくなった。周りの社員が帰ろうとするところまで、仕事を引き延ばそうと思うようになった。

結局、知世の帰宅が許されたのは、それから数時間後の終電間際の時間であった。

大勢の社員が、終電を待っていた。

みんなぐったりしていて、眠たそうにしている。きっと自分も同じ顔をしているのだろうと、知世は思った。

「明日も会社か……」

午前中に出勤し、夜中に帰宅する毎日だ。

明日も明後日も、明々後日も繰り返されるのだろう。休日もろくに休めず、せつかく借りた家には寝に帰るだけで、心をどんどんすり減らしていくのだ。

明るい未来が見えない。そもそも、未来が一切見通せなかった。

ずっと今の調子で仕事をし続けたらどうなるのか、黒い霧むやに阻はばまれて、何も考えられない。

「会社に、行きたくないな」

知世の呟きが、終電を報せる駅のアナウンスにかき消される。

でも、会社に行かなくては給料が稼げない。それに、自分がいなくなったら業務が滞ってしまう。自分は会社を動かす歯車の一員で、一人欠けたら皆が苦勞することになるのだ。

それに、給料が稼げなくては家賃が払えなくなる。家賃が払えな

くては、実家に戻らなくてはいけない。

両親は、東京の企業で正社員になれたことを喜んでくれた。会社に行くのが嫌で実家に帰ったら、きっとガツカリさせるだろう。悲しませるかもしれない。両親が失望した顔は、見たくなかった。

「でも、会社に行くのは嫌だな……」

どうしたら会社に行かなくて済むだろう。病気になって、高熱でも出れば「休め」と言われるだろうか。

だが、それよりもっと手っ取り早く、長く会社に行かずに済む方法がある。

知世は終電を待つ列から外れ、吸い込まれるようにふらふらと、線路へ向かう。

もうすぐで終電がやって来る。転落防止柵を乗り越えて線路に飛び込めば、明日は出勤しなくて済む。

会社に行きたくない。ここではない、何処かへ行きたい。

自分が『ここ』からいなくなれば、会社に煩わずらわされることもない。

両親もまた、仕方がないと諦めてくれるだろう。

駅員が別の方角に気を取られている隙に、知世は導かれるままに走り出そうとした。

だが――。

「待って」

その腕が何者かによって掴まれた。

終電は前照灯を煌々と照らし、大量の客を詰め込んでホームにやって来る。知世は、飛び込むタイミングを失ってしまった。

「な、なんですか、あなた！」

知世は慌てて腕を振りほどこうとする、しかし、びくともしなかつた。

「君、顔色が悪いよ。僕でよかつたら、話を聞こうか」

知世の腕を掴んでいるのは、若い男性だった。その手は力強かつたが、知世が腕を捻らぬよう、優しく掴んでいた。

知世は、気付いた時には泣いていた。

終電はぞろぞろと乗り込む人々を吸い込むと、知世を置いて走り去ったのであった。

その男性は、八坂或人と名乗った。

春めいたパステルカラーのコートを羽織り、ロリポップのような髪色をした甘いマスクの青年だ。

深夜の東京は、眩しいネオンと夜の闇のコントラストが激しかったが、八坂がいるだけでネオンが穏やかになり、闇が薄くなるのを感じた。初対面なのに不思議な安心感があり、春風のような優しい香りがした。

知世は、八坂に導かれるままに深夜営業をしているカフェに入った。アルコールや煙草タバコの臭いは一切感じられず、コーヒーココの芳ばしい香りとスイーツの甘い香りだけが漂っていた。

終電を逃したカップルがお喋りをしていたり、クリエーターおぼと思しき風貌ふうぼうの客がノートパソコンと睨めっこをしていたりする中、二人は窓際のカウンター席にやって来た。

窓から家路を急ぐ人々をぼんやりと眺めながら、知世は温かいカフェオレを一口飲むと、堰を切ったように話し始めた。

両親の期待を背負いながら田舎から上京し、IT企業に入ったこと。

ホームページではアットホームと銘打っていたIT企業であったが、実際は空気を読むことを強要され、上辺だけのアットホームであったこと。土日祝は休日とされていたが、休日出勤が断れない雰囲気であること。先輩達は仕事と遊びの時間が入り混じっていて、そのせいで進捗が遅れているのに、自分にしわ寄せが来ること。そして、どんなに早く仕事を片付けても次から次へと押し付けられることなど、全てをぶちまけてしまった。

八坂は初対面なのに、「それはひどい」「大変だったね」と一つ一つに相槌あいづちを打ち、真摯しんしに聞いてくれた。

彼が一つ同意してくれる度に、知世は自分が押し殺していた感情

が溢れるのを自覚した。気のせいだからと蓋ふたをしていた負の感情が、一気に噴き出したのである。

次から次へと、涙がこぼれた。そのせいで、カフェオレはしょっぱくなっていた。

「すいません、初対面なのに……こんな……」

「いいんだよ。引き留めたのは僕だし」

八坂は、全く気にしていないように微笑む。気さくな人だな、と知世は思った。

「でも、八坂さんに止めてもらってよかったです。あの時、私が飛び込んでしまったら、色んな人に迷惑をかけていたでしょうし……」
なにせ、夜遅くまで働いていた人達が家に帰れるか否かを左右する終電である。

人身事故で止まってしまったら、どれだけの人に迷惑をかけるだろう。帰れないどころか、明日の出勤にも影響を与えるかもしれない。

「あした……」

知世は、軽くなったはずの気持ちが一気に沈むのを感じた。

「明日、会社に行きたくない」

知世の願望を、八坂が口にした。心を読まれたのかと思って、知世はぎよっとする。

だが、八坂は相変わらずの笑みを浮かべたままだった。

「君は出勤したくないから、自分を壊そうとした。その結果、『呪い』を振り撒こうとしたんだ」

「呪い……？」

恐ろしい響きに、知世は息を呑む。

だが、言い得て妙だとも思った。なにせ、知世が飛び込んだら、大勢が迷惑を被ることになるのだ。これを忌むべきもの——呪いと表現するのも間違っていないのだろう。

「でも、あの方法はリスクが伴うからね。僕はおすすめしないかな」

「色んな人に、迷惑をかけちゃいますしね……」

「それもあるけど、失敗する可能性がある。その結果、もつと歪ゆがんだ呪いを生み出すことになるからね」

「失敗……？」

「人間は簡単に壊れないんだよ」

八坂は笑顔のまま、さらりと言った。

「それって、どういうことですか……」

「正確には、一瞬で全壊するのは難しいということさ。基本的に、生物は生きることとを目的に作られているからね。理に背くには、強い力が必要だ。大抵は半壊に留まり、徐々に死に近づいていく」

「即死じゃない……ってことですか？」

「四肢^{しし}がちぎれても、しばらくの間は意識があるようだね。君は出勤から逃げるために、出勤以上の絶望と苦痛を味わいながら死ぬことになる」

八坂の口調は軽かった。だからこそ、知世は話している内容とのギャップに恐ろしくなった。

「投身自殺もそうだね。意外と一命を取り留めるものの、動けない身体になることもある。意識は、ハッキリとしているのにね」

意識はあるのに、ベッドの上で動けず、自分の意思も伝えられない。見舞いに来た両親は悲しげな顔で同情の言葉をくれるのに、自分分は謝罪も感謝も出来ない。そしていずれ、「この子をこのままにしていいのだろうか」「きっと私達の声も届いていない」と両親が絶望する様を、黙って見ていなくてはいけないのだ。

知世は、想像するだけで胸が痛くなるのを感じた。身体が動かないのなら、自ら終わりを選ぶことも出来ないのだ。

「それに、自殺が起きた場所は、忌むべき場所だと人々に認知^{いたずら}されるから、『呪い』が溜まりやすくなるんだ。そういう場所が悪戯^{いたずら}に増えると、気の流れも乱れやすくなる。そうすると、この街が孕^{はら}む苦痛が増えてしまうからね」

また、『呪い』だ。

春風のような青年が時々口にする陰鬱^{いんうつ}な単語が、知世は気になっ

て仕方がなかった。

「八坂さん、『呪い』に詳しい人……なんですか？」

自分でも何を言っているのだらうと、知世は思いながら訊ねた。

呪いなんて、大昔の人が信じていた空想なのに。丑うしの刻こく参りをしたって、相手に何の苦痛も与えられないはずなのに。

だって、本当に効果があるのだとしたら、この世の人はみんな、憎い相手を模した藁人形わらにんぎょうに五寸釘を打ち付けているだらうから。

知世の荒唐無稽こうとうむけいな問いを、八坂は笑い飛ばさずにやんわりと受け止めた。

「多少は、『呪い』に詳しいかな」

「そ、そうなんです。因ちなみに、私はお金ないですよ……」

実は靈感商法で、高価な壺つぼでも買わされたらどうしよう、と知世は不安になった。

だが、八坂は「ははっ」と声をあげて笑う。

「まさか。君からお金を取ろうなんて思っていないよ。ただ、僕は人の苦痛を減らしたいだけなんだ。君が抱く『呪い』も、使い方さえ変えれば苦痛を取り除くのに役に立つから」

「へえ……」

知世は生返事しか出来なかった。八坂が何を言っているのか、理解が出来なかったのだ。

だが、苦痛を取り除くというのは魅力的であった。知世の目的は死ぬことではなく、苦痛を取り除くことなのだ。

八坂の言う『呪い』のことは分からなかったが、この青年が知世の悩みの根本を理解しているのだということは分かった。

「君の家は何処だい？ 家賃を教えてもらって構わないかな」

「えっと、高円寺です。安い物件があったので……」

「へえ、いいところだね。あの辺は僕も好きだな」

八坂は知世から家賃を聞きながら、懐からチラシを取り出す。

「でも、君の会社からは遠いんじゃない？ 新宿で乗り換えなきゃいけないし」

「そう……ですね。新宿駅の人ごみに揉まれるのが辛くて……」

それも、出勤したくないことの一因だった。地方暮らしをしている者にとって、東京の通勤帰宅ラッシュは戦に近かった。

「じゃあ、この物件がおすすめだよ。引っ越しして気分を変えるといい」

「えっ、引っ越し？」

「ああ。イエが変わると、気分も変わるものさ」

八坂はにっこりと微笑む。あまりにも説得力に満ちた笑みであった。

知世はチラシに目を通す。家賃は同じだが、勤務先に近くて、新

宿駅を経由しなくて済みそうだった。

物件は南向きで、日当たりは良さそうだ。

陽の光を浴びると、沈んだ気持ちが晴れるらしい。確かに、気分転換になりそうだった。

と言つても、陽の光を浴びられるのは日曜日くらいになりそうだが。

どうせ、家具もそれほど多くない。引っ越しをするのは簡単だろう。

「検討してみます」

知世はチラシを受け取り、話を聞いてくれた八坂に礼を言って立ち去ろうとする。八坂は親切にもタクシーを手配してくれて、自分が引き留めたからとタクシー代を支払ってくれた。

絵に描いたようないい人だった。

多少、変わっていたけれど、そんなのは些細なことだ。年下の女性を殴る男や、露骨に妬む男ねたと比べたら仏のようであつたし、比べるのすら失礼だ。

「引っ越し、か」

明日、不動産屋に物件について問い合わせしてみよう。

それに、会社の近所に引っ越すための物件探しというのなら、先輩だつて早く帰してくれるに違いない。

知世はチラシに書かれてあった、『不動産会社マイイガ』に連絡することを決意したのであった。

藁にもすがる思いで、知世は八坂が教えてくれた物件に引っ越した。

六畳一間であったが、日当たりは良かった。

引っ越しをするからという理由で土日の休みを確保し、知世は土曜日に荷物を運びこんだ。

大きな窓から燦々と射す陽の光が眩しい。

でも、この日光を充分浴びられるのも、今日と明日くらいだ。月曜日になったら、また、深夜にならないと帰れない。

そう思うと、涙が出てきた。ぼんやりとした不安が胸から込み上げ、次から次へと涙を溢れさせた。

「この週末くらいは、ちゃんと休もう……」

涙を拭くと、知世はテレビをネットに繋ぎ、ストーリーミング配信を見始めた。見ようと思っていたのに、いつの間にか最終回が終わっていたドラマを、一気に視聴したかったのだ。

まだ荷解きがあったが、動画を見ながらも出来る。知世は、少ない段ボールを開けて洋服や雑貨を取り出しながら、ドラマを眺めていた。

そこには、普通の人達の他愛のない生活があった。主人公の女性は、定時に仕事を終えて帰り、東京スカイツリーが見えるレストランで恋人と待ち合せて、何気ない会話を楽しむのだ。

「いいなあ……」

自分の心に、ぽっかりと穴が開いているのを感じる。彼らが羨ましくて仕方がなかった。

だが、不思議と涙は零れなかった。枯れてしまったわけではない。包み込まれるような、妙な安心感があった。

心に空いた穴が溶けたチョコレートで塞がれていくかのように、あまりにも心地が良かった。

恋人と会話をして幸せな気分を味わう主人公が、自分であるかのように錯覚出来た。悲しい気持ちだが、何故だか感じられなくなった。

仕事はもう、どうでもよくなっていた。むしろ、どうしてそんなに、仕事に怯えているのか分からなくなっていた。

久々に陽の光を沢山浴びたからだろうか。八坂が言っていたように、苦痛が取り払われるのを感じた。

知世は自然と笑みを零す。笑うのなんて、いつぶりだろう。

そんな幸福感にまどろみながら、知世の意識は闇に沈んだのであった。

「——さん！ 吉原さん！」

知世は頬に痛みを感じた。うつすらと目を開けると、闇の中で自分に覆い被さっている人物がいた。

「——っ！」

悲鳴をあげたはずが、声が出なかった。相手を払おうとしたはずが、腕が上がらなかった。

「よかった、気がついた……！！」

自分に覆い被さっていたのは、見知らぬ若い男性だった。彼は知世が瞼を開くなり、胸を撫で下ろして知世を床に横たえた。

いや、知世は一度だけ、彼の顔を見たことがあった。少し冴えない顔立ちだが、誠実そうな目をした人物は——。

「不動産屋……さん……？」

ひどく掠れた声で、知世は問う。

「そうです。吉原さんを担当した榊です」

榊は安堵のあまり、気が抜けた顔をしていた。

榊の背後には、黒い上着を纏った青年がいた。二枚目俳優かと思ふほど美しい顔をしていたが、気難しい表情をして部屋を見回していた。

部屋は、真っ暗だった。

開けっ放しのカーテンから夜を照らす街灯の光が漏れ、開放した

ままの玄関から共用廊下の灯りが見えるくらいだ。

ドラマを見たまま、夜まで眠ってしまったのだろうか。だが、どうして不動産屋が乗り込んで来たのだろうか。

テレビは動画配信サイトのメニューを映しているだけだった。どうやら、ドラマは最終回まで流しっ放しになっていたらしい。

ぼんやりとする頭で、知世は近くにあったスマホに手を伸ばす。

「えっ、これ……」

画面を見て、ぎょっとした。

会社から、十数件の着信が来ていたのだ。SMSにも、「どこ行った」「仕事たまってるよ」と先輩社員からの怒りのメッセージが届いていた。

曜日を見てみると、水曜日になっていた。知世は三日も、無断欠勤をしたらしい。

着信やSMSは、火曜日で止まっていた。恐らく、会社はもう、知世が出勤しないものと思うことにしたのだろう。

「緊急事態だと思って、入らせて頂きました……。勝手に入室したことは申し訳ございません……」

榊は律義に頭を下げる。知世は、何が何だか分からなかった。

「あの、私は土曜日に引越してきて……それからずっと、寝てたんですか……?」

段ボールは半開きになり、洋服は中途半端に出されていた。大型家具を梱包こんぽうしていた段ボールは廊下に置きっ放しになっており、引越しの直後にしか見えない部屋であった。

「君は、自らを呪っていた」

黒衣の青年が口を開いた。また、『呪い』だ。

「い、九重こゝろさん……」

榊はぎよつとした顔をする。どうやら、黒衣の青年は九重というらしい。

「いや、君が内包する呪いが、君に向かうように仕向けられていた——という表現の方が正確だろうな。丁寧に編まれた呪いに、君の呪いが作る流れが乗せられていたようだ。水路に、水を流すように」

「な、何を言ってるんですか……。呪いだなんて……」

そんなもの、実在するわけではない。

知世はそう思いながらも、心がざわつくのを感じた。早く明かりを点けようと、手探りで照明のリモコンに手をかける。

「点けるな！」

九重の鋭い声が、知世を制す。

彼は注意深く辺りを見回し、そして、ベランダに目を止めた。

「榊」

「はー！」

「室外機はあそこか」

「あつ、そうです！」

榊が答えるや否や、九重は室内を大股で歩き、勝手に窓の鍵を開けてベランダの室外機と相對する。

彼は室外機の裏を覗き込むと、「あつた」と声をあげた。

一体、何があつたのだろう。

知世の好奇心は、現実から目をそらしたいという気持ちとぶつかり合つた。

そう言えば、何故、この部屋は異様に暗いのか。

照明が消えているとはいえ、街灯や共用廊下の光が入ってきているので、ある程度は見渡せるはずだ。

それなのに、部屋は真つ暗だった。まるで、黒いクレヨンで塗り潰したかのように。

「あつ……！！」

榊が声をあげる。

九重の目線の先のものに気付いたのか、それとも、部屋の様子を見てか、知世には判断がつかなかった。

「——急急如律令。我が呪いによりほど解けよ！」

九重は慣れた様子で印を切り、室外機の裏にあつた何かを剥がした。

それは、紙片だった。神社で目にする、お札のようにも見えた。
次の瞬間、部屋全体が動いた。

いや、部屋を覆っていたものが、蠢いたのだ。

「ひっ……!!」

それは、蟲だった。

百、いや、千を超える百足のような漆黒の蟲が、天井や壁、そして床に至るまでびっしりと埋め尽くしていたのだ。

「ひいひい!!」

榊は目を剥いて悲鳴をあげる。知世のか細い悲鳴は、彼の声にかき消された。

蟲は一斉に九重が開けた窓へと向かい、波のように引く。

一瞬の出来事だった。

蟲がいなくなると、外の光は照明がついていない部屋全体をぼんやりと照らし、家具が少ない部屋の天井や壁が見渡せるようになった。

「い、今は……」

『呪い』だ」

ベランダから戻って来た九重は、鍵をきつちりと閉めてそう言った。

「恐らく、人が持つ呪いの力を利用し、本人の苦痛を麻痺させるも

のだ。君は苦痛を感じないまま、衰弱死するところだった」

「衰弱死……」

知世はオウム返しに呟くことしか出来なかった。飲まず食わずでいた身体では、彼が言っていることを欠片も理解出来なかった。

「救急車、呼んでおきますね。なにかを食べるより、点滴をして貰った方が良さそうですし……」

榊は知世を気遣うようにそう言って、スマートフォンを操作する。知世もまた、自らのスマートフォンを見やる。

暗がりで映し出された自分の顔は、唇がカサカサになり、死人のようにやつれていた。

酷い有り様だった。どうしてこんなになってまで、自分は東京の会社にしがみついていたのだろう。

疑問と同時に、怒りが込み上げてきた。

どうして自分が、いいように扱われなくてはいけないのか。勤務中に遊び、人を殴ることを容認する会社になって、いる価値はあるのだろうか。

自分がしがみついていたものが、急に馬鹿馬鹿しく思えた。会社に何の価値も見い出せなくなった。

あんな会社、辞めてしまおう。

そして、実家に帰って静養しよう。親の期待を裏切ってしまうけ

ど、ここで死んでしまつては意味がない。

「あ、そう言えば……」

知世はかすれた声をあげる。上京する時、「辛くなつたら帰つておいで」と両親は言っていたではないか。

何故、今更になつて思い出すのか。自分が逃げ込む先は、ちゃんとあつたのに。

知世はどつと疲労の波が押し寄せるのを感じ、そのまま意識を手放したのであつた。

吉原知世は、榊が呼んだ救急車に乗せられて病院へと運ばれた。赤いランプが夜の闇を切り裂くのを眺めながら、榊は胸を撫で下ろす。

「吉原さん、危なかつたみたいですね。間に合つて良かった……」

「ああ。君の手柄だ」

「いや、九重さんのお陰ですからね？ 僕一人じゃ、何も出来ないし……」

榊はたまたま、知世がマヨイガにやつて来た時に担当になつただ。

即入居可の物件だったので、すぐに彼女を案内したのだが、マヨイガにやつて来た知世の様子があまりにも異様で、気になっていた

のだ。

「吉原さん、すごくやつれてて、そのまま何処かに飛び込みでもするのかって感じで、心配だったんですよね。でも、不動産屋に出来ることなんて、物件を紹介することくらいですし」

「だが、彼女の不自然さを気にして、君は専門家に連絡を入れただろう。良い働きだった」

「へへへ……、九重さんに褒めて貰えると嬉しいですね」

照れくさそうな顔をする榊であったが、すぐに、その笑みが消えてしまう。九重は、室外機の裏にあった紙をしかめっ面で見つめていた。

「九重さん、それって……」

「何者かが、あの物件を呪っていた。心当たりは？」

九重に問われ、榊は激しく首を横に振った。

「また、うちの物件が呪われていたなんて……。もしかして、前の取りこぼしでしょうか……」

「いや。呪物じゆぶつが違う」

不動産会社マヨイガの物件は、以前、創業者が掛けた呪いによって怪現象に見舞われていた。

それは結局、呪いではなく願いだっただが、結果的に多くの怪異を呼び込んでしまったのである。

その時は、木で出来た人形が使われていた。しかし今回使われたのは、紙で作られた呪符じゆふである。

「じゃあ、誰がこんなことを……」

「……………」

榊の問いに、九重は沈黙した。

彼は、分からない時にはハッキリと言う男だ。なにか、心当たりがあるのかもしれない。

「俺はこれに、見覚えがある」

「えっ、本当ですか？」

「だが、同じ流派かもしれない。もう少し、調査が必要だな……」

「調査って、これと似たようなことがあるかもしれないってことで
すか？」

九重は考え込む仕草をした後、こう言った。

「もし、そういうことがあったら、俺に連絡してくれ」

「言われなくても連絡しますよ。九重さんしか、頼れる人がいない
わけですし……」

九重は呪いを専門にしている『呪術屋』だ。

そんな商売をしている人間、他には知らないし、いるとも思えない。
い。

「ところで、吉原さんに言わなくても良かったんでしょかね」

「何がだ」

「えっと、彼女の職場の先輩らしき人、今朝、事故に遭ったってことを」

榊は知世の無事を確認する前、それとなく彼女の勤務先に、彼女が出勤しているか探りを入れたのだ。

だが、彼女の勤務先はそれどころではなかった。彼女の世話をしていた先輩社員が、今朝、通勤列車に吸い込まれるように線路へ落ちたという。

駅の監視カメラを見ても、誰かが彼を押しした形跡はなかった。駅でたまたま彼と出会った社員も、「酒に酔っている様子はなかった」と証言していたそうだ。

事故に遭った先輩社員は、亡くなった。だが、現場ではしばらく、呻うめき声が聞こえたらしい。

「彼女が出勤した時に分かることだ。今は、刺激しない方がいい」「そうですね……」

九重の意見に、榊は全面的に賛成だった。衰弱している人間に、ショッキングなことを教えることも追い打ちをかけるだけだ。

「因みに、その駅はどこだ」

「えっと、確かあつちの——」

榊は駅名を思い出しながら、駅の方を見やる。

その時だった。街灯が照らす夜道を、ちよろちよろと歩く小さな影が見えたのは。

それは、百足のようだった。ひよろりとした身体をくねらせ、無数の足で這いながら、榊が指さした方からやって来て、知世の家にいた『呪い』が去って行った方角へと消えていった。

「今のは、もしかして……」

「……苦痛を消す呪いは、苦痛の根本を取り払おうとしたのかもしれないな」

九重は眉間に深い皺を刻み、百足が消えて行った方を見やる。走って追いつく速度ではなかった。

榊は鼻先に、つんとした微臭さを感じる。きっと、呪いの臭いだ。都心にまた、呪いが蔓延っている。

新たな波乱を感じながら、榊はネオンに照らされる夜景を眺めていた。

〈つづく〉